



# 対がん協会報

公益財団法人 日本対がん協会 「日本対がん協会」と「対がん協会」は登録商標です  
〒100-0006 東京都千代田区有楽町2-5-1 有楽町センタービル(マリオン)13F  
☎(03) 5218-4771 <http://www.jcancer.jp/>

主な  
内容

- 2面 キャンサー・サバイバー・フォーラム  
3面 黒川利雄がん研究基金 助成公募  
4、5面 RFLヒーローズ・オブ・ホープ  
6面 ピンクリボンフェスティバル報告会

## ピロリ除菌者の胃がん発症は? HPVワクチン接種者の子宮頸がん発症は?

### 検診・問診票で履歴の記載を 対がん協会がグループ支部に要請

ピロリ菌(ヘリコバクターピロリ)を除菌すれば胃がんの発症は防げるのだろうか。HPV(ヒトパピローマウイルス)ワクチンの効果は—。日本対がん協会は、がん対策への効果が期待されている「ピロリ菌除菌」と「HPVワクチン接種」について、それぞれ胃がんと子宮頸がんの検診の問診票で、受診者に履歴を尋ねる項目の掲載を全国のグループ支部に要請した。

いずれも受診者の健康管理に欠かせない項目で、個人情報に配慮しつつ、検診の結果を追跡調査することも考えている。対がん協会では、公衆衛生に役立つ大規模データが得られると期待している。

「ピロリ菌除菌」について、問診票での質問項目の掲載を要請したのは、ピロリ菌の除菌歴と除菌の時期。除菌が成功したかどうか、医師に確認してもらったかどうか尋ねたほうが

良いものの、事務量が増えるため「可能な範囲」で協力を求めた。

胃がん検診の受診者に除菌歴を尋ねる理由は、「除菌者」には、胃がんが見つからないのか、見つかるのか。見つかるとしたら、どれくらいの割合で見つかるのか、除菌からどれくらいの時間がたって見つかるのか……などを調べることができるからだ。

胃がんの発症にはピロリ菌がかかわっていることがわかって以来、除菌すれば胃がん予防になるのでは、という期待が生まれた。

日本では2013年春から、胃炎の患者がピロリ菌を除菌する場合に保険が適用されるようになったこともあり、胃炎患者の除菌で胃がんも防げるのではないかと考える人も少なからずいる。

しかし、ピロリ菌がどの程度、胃がん発症にかかわっているのか、まだ明らか

ではない。感染している人のうち発症する人の割合は非常に少ないこともあり、そのメカニズムの研究が続けられている。

一方、専門家によると、海外からは、除菌者にも胃がんが発症していることが報告されているという。

こうした状況を受け、対がん協会では、受診者本人の健康管理にも除菌歴の有無を把握することが欠かせないと判断。検診を実施しているグループ支部に協力を求めることにした。

子宮頸がん検診の問診で尋ねるのは、HPVワクチンの接種歴、接種した時期、回数、ワクチンの種類。それぞれの支部で可能な範囲で協力を求めた。

HPVワクチンの接種歴を尋ねるのは、ワクチンを接種すれば子宮頸がんの発症を完全に防ぐことができる、というわけではないからだ。どの程度、発症が抑えられるのか、一般の社会

において、その効果が検証されたことはない。

子宮頸がんの原因となるHPVのタイプは複数あり、国・地域によって分布が異なることも指摘されている。現在使用されているワクチンは、子宮頸がんの原因の7割を占める2つのタイプのHPV感染を防ぐとされる。

日本での効果が期待を上回るのか、それとも下回るのか、検証が欠かせない。

接種者本人の健康管理につながるだけでなく、子宮頸がんの発症ぶりの変化の分析にもつながる。

こうした取り組みが日本で全国的に実施できるのは、対がん協会の各グループ支部以外にはない。

対がん協会は「日本のがん対策上、重要な取り組みだと考えている。可能な範囲でかまわないので、グループ支部にはぜひ協力をお願いしたい」と話す。

**がん相談ホットライン** 祝日を除く毎日  
03-3562-7830

日本対がん協会は、がんに関する不安、日々の生活での悩みなどの相談(無料、電話代は別)に、看護師や社会福祉士が電話で応じる「がん相談ホットライン」(☎03-3562-7830)を開設しています。祝日を除いて毎日午前10時から午後6時まで受け付けています。相談時間は1人20分まで。予約は不要です。

**医師による面接・電話相談(要予約)**  
予約専用 03-3562-8015

日本対がん協会は、専門医による面接相談および電話相談(ともに無料)を受け付けています。いずれも予約制で、予約・問い合わせは月曜から金曜の午前10時から午後5時までに☎03-3562-8015へ。相談の時間は電話が1人20分、面接は1人30分(診療ではありません)。詳しくはホームページ(<http://www.jcancer.jp/>)をご覧ください。

# 接種勧奨の再開 判断は今年に持ち越し

## 子宮頸がんワクチンの接種で厚労省の検討会

子宮頸がんワクチン(HPVワクチン)の接種勧奨を再開するかどうかの判断は2014年に持ち越された。12月25日に開かれた厚生労働省の検討会で、報告された被害と接種との因果関係、対策などをさらに調査・検討する必要があるとされた。

この日開かれたのは、厚生科学審議会予防接種・ワ

クチン分科会副反応検討部会と薬事・食品衛生審議会医薬品等安全対策部会安全対策調査会(合同開催)。

長期にわたって頭や腕、脚などに痛みが残った97人の経過について、半数が改善したと報告され、専門家から「早期に気づいて治療すれば改善しやすい」との指摘があった。

厚労省では、全国17カ

所に整備している痛みの専門施設を中心に、さらに詳しく調査し、接種と副作用の関係、最適な治療法などの検討を重ねる。

このワクチンは2009年に承認された。厚労省は翌10年秋から「緊急接種促進事業」の中で中学生を中心に接種を勧奨。昨春、予防接種法を改正して定期接種の対象の一つに含めた。

一方で、痛みが長引き、通学できないなどの副作用被害の報告が増え、厚労省は13年6月、積極的な接種勧奨を中止し副作用と接種の因果関係などの検討を重ねている。

8、9月の接種者は約1万5000人。4～7月の24万人から急減しているという。

## 「がんへの偏見をなくそう！」体験者たちの語りで社会を変える キャンサー・サバイバー・フォーラム開かれる

「サバイバーシップを考える—サバイバーの声からがんを知り、がんの偏見をなくそう!—」。様々な場面に有形無形の偏見が存在する社会を、がんサバイバーたちが語ることで変えようという集い「キャンサー・サバイバー・フォーラム」が12月7日、東京都内で開催された。

フォーラムは、サバイバーたちがそれぞれに遭遇したことを三つに分けて展開された。

セッション1のテーマは「がんと自分の周りのコミュニティ—家族、職場のこと—」。悪性リンパ腫を体験した竹本治さんは、がんを明かしたことで周りからサ

ポートを受けられ、社会のあたたかさを感じた。そんな周囲に感謝し、いまは支える側に。次の人への還元という。

モデレーター的小山田万里子さんは子どものころ、母親が患ったがんのことを教えてもらえなかった。「隠された」印象がある一方で、告げられてもどうしたらよいかわからなかったことを振り返り、何もできなかったという思いがわだかまっていることを打ち明けた。

妻を卵巣がんで亡くした浪瀬耕造さんは、不安や恐怖、孤独感を抱える妻とどう向き合えばいいのかわからなかった。2人でピアサポーターらに相談するう

ち、妻が悩みを話し出すようになった。自分をわかってもらえた安心感を抱いた妻、そんな妻を見ている自身も救われた、と話した。

セッション2は「がんと自分～自分の病気、治療、生活のこと～」。久田邦博さんは慢性骨髄性白血病を経験。サバイバーと会ううちに医師の指示を守っていない人が多くて驚いた。知識や情報を持つ人だけが生存する社会でいいのだろうか、と問いかけた。

若年性乳がんの経験者、鈴木美穂さんは抗がん剤の副作用で髪が抜け、カツラを買いに走ったときのエピソードを紹介した。試着に戸惑って店員にがんだと打ち明けると、パーテーションを用意してくれたという。サバイバーとして生きる、それが社会の偏見をなくす機会だと訴えた。

セッション3「がんと社会～がんの社会イメージとのギャップ～」では、サバイバーが自分自身とも向き合った。

中学生のときに軟部肉腫

を患った宗像若菜さんは通学もままならず、「独りぼっち」に。社会人になっても、がんのことは話さず、周囲と距離ができた。ある時、「ありのままの自分で生きていきたい」という気持ちが芽生えた。告白。発症から15年がたった。そこには、自身に潜在的な偏見があったと話した。

大腸がんを経験した足立伸吾さんは、「だれも病気の話はしたくないし、あわれみを求めるのは恥ずかしいこと」と思ってきた。そんな自分がつらくてたまらなかつた時、一人の女性と出会った。妻であり母である彼女が、仕事からも家庭からも逃げずにがんと闘う姿を見て自分が逃げていたことを悟った、という。

フォーラムは、Over Cancer Togetherキャンペーン運営委員会(日本医療政策機構、キャンサーネットジャパン、ジャパンフォーリーブストロング)が主催し、厚生労働省、国立がん研究センター、日本対がん協会が後援した。



がんへの偏見をテーマに語り合われたフォーラム  
=12月7日、東京都千代田区

# がん予防・早期発見の研究助成

## 希望者公募

## 黒川利雄がん研究基金

がんの予防や早期発見をめざした研究を助成します— 宮城県対がん協会は「黒川利雄がん研究基金」の2014年度の助成希望者を募集している。1件あたり100万円を限度に、総額220万円の助成を予定している。

対象とする研究は、①がんの疫学および集団検診に関する調査・研究・開発②がんの早期発見および治療に関する調査・研究・開発—

の2分野。

応募資格は、がん予防や早期発見をはじめ、がん対策にかかわる研究に取り組む50歳未満の個人・団体で、宮城県対がん協会の理事か、希望する個人・団体が所属する機関・組織の所属長の推薦が必要。応募は、1個人・1団体、または共同研究グループで1件とし、推薦件数も1人1件としている。

応募方法は、宮城県対

がん協会のホームページ (<http://www.miyagi-taigan.or.jp/>)から申請書をダウンロードし、必要事項を記入して〒980-0011 仙台市青葉区上杉5-7-30 宮城県対がん協会「黒川利雄がん研究基金」事務局あてに郵送する。申請書類は、はがきか、ファクス(022-263-1548)で取り寄せることもできる。問い合わせは☎022-263-1637へ。

応募の締め切りは3月末。基金の運営委員会で審査し、結果を5月に発表して6月に交付を予定している。

黒川利雄がん研究基金は、宮城県対がん協会の初代会長、黒川利雄博士の遺志を受け、がん対策の長期的展望を開くために1989年に創設された。2013年度までに103人に対し、総額6690万円を助成している。

## 奨学医レポート

### 抗がん剤に内視鏡……先端技術に触れた半年

愛知県がんセンター中央病院消化器内科 佐藤高光



昨春、横浜市立大学から愛知県がんセンター中央病院の消化器内科のレジデントになり、勉強してきました。

同センターは日本屈指の先端施設なので、がんに関する専門知識および治療などの技術を習得するため全国からキャリアを問わずにモチベーションの高い「同志」が研修を受けに来ています。

ひと口に消化器内科といっても、内容は多彩です。

診断には画像の読影力が欠かせません。治療方針の

決定には疾患の知識が必要です。治療するには化学療法を学ばなければなりません。加えて学会報告や論文作成……非常に奥が深い内容でした。半年間の研修で学んだことを振り返ってみます。

前半の3カ月間は胆膵グループで、主に難治がんである膵臓がんや胆道がんの診療に携わりました。

胆膵領域は、非常に悪性度が高い疾患が多い分野で、治療手技も専門性が高く、容易には習得できません。そんな分野ですが、同センターでは、超音波内視鏡(EUS)による診断手技の指導と最先端の治療手技に長け、世界中から見学者が訪れます。

胆道がんや膵臓がんの診療では、EUSガイド下穿刺吸引術(EUS-FNA)や内

視鏡的逆行性胆膵管造影(ERCP)を用いて病理学的に診断します。それに基づいて治療方法を検討し、手術や化学療法といった治療を始めるのです。

そんな日々を過ごす中で、診断から治療、緩和ケアを含めて総合的に患者さんと向き合い、難治がんと対峙することができました。

後半の3カ月間は消化管グループでの勉強でした。消化器内科医としてこれまで消化管の診療には携わってききましたが、拡大内視鏡や消化管造影検査を組み合わせた進達度診断の読影など、専門的ながん診断について初めて指導を受け、非常に満足のいく勉強ができました。

内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)をはじめとする内視鏡治療では、治療の介助

者として、また時に術者としての経験を積むことができました。

化学療法に関しては、胆膵、消化管を問わずに常に患者さんを受け持ち、様々なレジメンに基づく治療の導入や副作用の管理など、幅広く学ぶことができました。学会や研究会での発表や各自のテーマで英語論文の作成など、学術的な指導にも力を入れていただき、刺激的な日々を送ってきました。

半年間は実に充実した期間で、あっという間に過ぎます。多くの患者さんの診療に携わりつつ、バランス良く勉強することができました。同センターで研修ができたことに非常に感謝しております。今後ますます修行に励みたいと思っております。

# リレー・フォー・ライフ

# ヒーローズ・オブ・ホープが語る「私とリレー」

リレー・フォー・ライフの普及に大きく貢献した人に贈られる国際リレー・フォー・ライフの「ヒーローズ・オブ・ホープ」の日本の受賞者は14人。日本にRFLが登場して8年目の今年、開催は50カ所を数えようとしている。そのリーダー的存在のヒーローズにRFLを語ってもら

った。(受賞年別、五十音順。①好きな言葉②患ったがん、最初の治療、サバイバー歴③休日の過ごし方④RFLを知ったきっかけ⑤受賞の感想⑥RFLのよかったこと、嫌だったこと。受賞者の1人三浦秀昭さんは昨年11月に亡くなった)



## 日本のリレーヤーの代表として 2010-11 坂下千瑞子さん (47) 東京・文京

①ピンチはチャンス!②骨軟部腫瘍。腫瘍脊椎骨全摘手術。8年目③子どもと遊ぶ。がん患者と家族の支援④再発治療中の2006年にテレビ報道を見て勇気もらった⑤日本のRFLが、世界のRFLに認められたと感じてうれしかった。日本のリレーヤーの代表として、サバイバーの想いやRFLへの想いを発信していけたら、と思った⑥全国(世界)の同じ想いを共有する仲間と繋がってうれしい。世界が広がって勇気と希望をもらい、何より楽しい!熱い想いがあるだけに、理解してもらえないときは、辛い。



## できることを地域で精いっぱい 2010-11 廣澤政男さん (72) 静岡・長泉

①自己活力。自己活性②大腸がん、肝臓転移。手術。左肺転移、一部切除手術。左声帯固着手術。9年目③抗がん剤治療中、動けることに喜びを感じ有意義に使いたい。ホノルルサイクリングレースへの参加めざしサイクリングを心掛ける④テレビ⑤できることを精いっぱい。大きな活動にならないが、RFLを広報し、知名度、認知度向上を図りたい⑥仲間ができ、情報共有の楽しみができた。一人で思いや悩みを抱え込まず、他の人のことに思い巡らす気持ちが芽生え、サバイバー仲間が自然と増えいくことをうれしく思う。



## つらくて涙を流す人のために 2010-11 宮部治恵さん (45) 福岡

①真実一路!! 継続“が”力なり!②子宮頸がん、直腸がん。手術(子宮・卵巣摘出)、抗がん剤、放射線。11年目③ボランティア、キャンプ、バーベキューなど④入院中の2006年2月、日本初のRFL開催をネットで知る。実行委員として参加。自分が今生きていることに意味があるのでは?と思い始めた。寂しくてつらくて涙を流す人がいるならRFLを続けていきたい⑤受賞に感謝している⑥多くの出逢い、つながり、人の大切さ、優しさ、たくさんの初めての経験ができた。多くの別れも経験した。だからこそ頑張れるのかなとも思う。



## 多くの縁に感謝 2011-12 大菅善章さん (50) 愛知・岡崎

①笑顔。前向き②胃がん。腹腔鏡外科手術部分摘出。6年目③家族サービス&バンド④テレビでの特番を見て⑤知っていた。共に活動してきた皆さんのおかげ。頑張っていれば報われる!!⑥RFLに関わらなければ出会えなかった方々と多くのご縁ができたこと。



## 受賞に誇り 2011-12 大菅年美さん (47) 愛知・岡崎

①笑顔②乳がん。温存外科手術、抗がん剤、ホルモン療法。6年目③現在子育て中のため、毎日子育て④NHKのドキュメント放送を見て⑤詳しくは知らなかった。とても名誉なことと思ひ、嬉しく思う。⑥素敵な仲間と知り合えたこと。



## 精神的な癒しに貢献 2011-12 山田啓蔵さん (64) 大阪・枚方

①明日はなにをしようかな②肺がん。放射線治療。7年目③妻と買い物④知人の紹介⑤2010年の4人の受賞に素敵な賞と思っていた。私の受賞は芦屋のメンバーの代表としてだと思う。今の命があるのも、メンバーや家族、友人のおかげ⑥三浦さんはじめ、私より重篤な人が精いっぱい生きている姿に感激した。「がん」という病気は、精神的にもつらい。RFLはそんな「がん」患者や家族、遺族の精神的な癒しに貢献しているように思う。ぜひ、多くの皆さんに知ってもらって、参加していただきたいと思っている。



## 生き方を変えてくれた 2011-12 山本克枝さん (56) 大分

①毎日今がその時をつくる②乳がん。温存手術、抗がん剤、放射線、一年間化学療法。7年目③友人とドライブ。庭の草取り。RFLJ大分がんサロン参加④テレビで見たRFL大分初開催の立ち上げのニュース。初代実行委員長坂下さんの笑顔に勇気もらった⑤坂下さんの授賞で知っていた。次にいただき自分自身の励みになった⑥RFLでいろいろな方と出会えたことは、サバイバーとしての私の生き方を変えてくれた。心から感謝。家族も関わってくれて絆が深まった。何事も一歩踏み出す勇気もらい、元気になった。



## 受賞に大きな責任 2012-13 櫻井ゆう子さん (55) 京都府亀岡市

①ありがとう。よき隣人になりなさい②乳がん。手術前ホルモン治療8か月、手術・放射線、ホルモン治療。3年目③部屋の整理、読書、ネコと昼寝④日本対がん協会ホームページ⑤受賞を知り、非常に驚いた。そして、大きな責任を感じた。⑥生きる希望になった。そして、全国にお友達ができた。猛暑の中を駆け回る準備期間は体力的にきつい時がある。



## RFL通じ自然と前向きに 2012-13 佐藤弥生さん (48) 東京都世田谷区

①希望と勇気。「皆さんのことを心配してくれる人がたくさんいます。皆さんのことを誇りに思っている人がたくさんいます。希望と勇気を持って頑張ってください。応援しています」②子宮頸がん、広範子宮全摘出術、14年目③ダンス系やヨガ、読書④三浦さんの活動が気になっていた⑤世界的ネットワークを通じ、サバイバーシップへの信仰の影響を改めて感じた⑥がん体験を共有できる仲間ができたこと。だからこそ仕事もしっかりできた。目標があるので自然と前向きになる。仕事と実行委員でリラックスする時間がなくなった。



## 多くの経験に感謝 2012-13 新城和子さん (61) 埼玉県白岡市

①あきらめない②甲状腺がん、多発性骨転移。甲状腺全摘、脊椎2カ所固定術、放射線治療。7年目③10月で実行委員を辞め、主人との時間を大事に過ごしたい④主人の友達からいただいたDVDを見たのがきっかけ⑤知っていた。私がこの様な賞を頂いてよいのかと思った。RFLを広く知っていただくため、積極的に広報活動を、と思いましたが、病状が悪化し思うように動けなく残念に思う⑥たくさんの方々を知り合うことができ、健康だったら経験できないこともさせて頂き本当に勉強になった。



## 前向きに生きるきっかけを 2012-13 浜中和子さん (63) 広島県尾道市

①「今日を精一杯生きる」!「どんなことがあっても最後までのおぞみを胸に持ち続けて生きて行こう」②乳がん。乳房温存手術、放射線治療、ホルモン治療。20年目③本業の診療以外とがん患者支援活動。年2回は海外旅行④2005年第1回がん患者大集会(大阪)で知った。翌年つくば市でのRFLからずとRFLに参加している⑤仲間の受賞を知っていた。RFLを多くの皆さんに知っていただき、悩んでいるがん患者さんが前向きに生きるきっかけになれば⑥多くの仲間と出会えたこと。RFLに来る人達の笑顔に出会えること。



## がんに強い社会の実現を 2013-14 アグネス・チャンさん (58) 東京都渋谷区

①Everyday is a new day. Everyday is my birthday.②乳がん。放射線治療、ホルモン療法。6年目③家族と外出④出演したテレビ番組がRFLを取り上げていた⑤受賞するまで知らなかった。受賞できて大変光栄に思う。これを励みにがんに強い社会の実現に向けて、仲間と共に頑張っていきたい。⑥RFLに関わって、たくさんの仲間ができ、がんについてたくさん勉強でき、自分の活動によってたくさんの人たちを励ますこと、応援すること、さらに新しいがんの専門医の育成やがんの研究に関われたことを大変感謝している。



## たくさん仲間との出会い 2013-14 横山光恒さん (44) 岐阜・各務原

①命を繋いでくれたのは医療、生き方を教えてくれたのは患者②ユーイング肉腫(PNET)。抗がん剤、放射線、手術。8年目③患者家族の支援活動④2006年、つくばの開催準備をホームページで知った。⑤2010年に三浦さんが受賞された時に知った。受賞し、感謝の想いととも、これからも続けていきたいと強く思っている。⑥たくさん仲間に出会えたこと。

## ラルフローレンが「PINK PONY DAY」 がん征圧に寄付を

ラルフローレン株式会社(東京都中央区)は恒例のチャリティイベント「PINK PONY DAY」を10月25日に開催。がん征圧支援の寄付金245万529円が集められた。日本対がん協会に寄付される。

2011年まではピンクリボン運動の支援として行っていたキャンペーンだが、現在はがんの早期発見、早期治療に関する知識を向上させ、医療格差をなくすことを目的に、同社が世界中

で展開している。日本でもすっかりおなじみになった。

同社は、このピンクポニーをあしらったTシャツなどを販売し、売り上げの一部を、各国のがん啓発団体などに寄付している。日本では、がん啓発、がん患者支援、がん検診を進める対がん協会を寄付先とし、2003年から支援を続けている。

「PINK PONY DAY」には、参加者全員がおそろ

いのピンクポニーTシャツを着て街頭をウォークし、がん啓発を行ったり、オークションを開いたりして。ピンクポニーにちなんだピンク色のスイーツや限

定グッズの販売などが行われ、商品の落札・購入金額の全額が寄付となる。

ただ2013年は台風の影響もあって天候が悪く、ウォークは中止された。



「PINK PONY DAY」に集まったラルフローレンの社員たち。=10月25日、東京都中央区

## ゴルフネットワークが今年も「ほほえみ基金」に107万余円を寄付



東尾理子プロ(左)から塩見・対がん協会常務理事に目録が贈られた。右はタレントの三瀬真美子さん=12月11日、東京ソラマチのJ:COMワンダースタジオ

ピンクリボン運動の支援を続けているゴルフ専門TV「ゴルフネットワーク」(東京都港区)は12月11日、

東京スカイツリータウンの東京ソラマチにあるJ:COMワンダースタジオで「ピンクリボンチャリティ金贈呈式」を開き、日本対がん協会の「乳がんをなくす ほほえみ

基金」への寄付107万1781円を目録を贈った。

贈呈式ではプロゴルファーの東尾理子さんとタレン

トの三瀬真美子さんが、女性の健康・ゴルフをテーマにトークショーを展開。健康を守るためには運動が大切なことや、乳がん検診の受診をアピールした。

二人のトークの後に、対がん協会の塩見知司常務理事・事務局長も加わり、日本人女性に乳がんが増えていくことや、早期に見つければ9割以上が治ること、そのためには、しこりなどの症状に気づかないうちに検診を受けることの大切さ

を訴えた。

最後に東尾さんから塩見常務理事に寄付金の目録が贈られた。

同社のピンクリボン運動への取り組みは2005年に始まり、2013年で9年目を迎えた。10月のピンクリボン月間から12月にかけて、人気のクラブを試し打ちできる「チャリティ試打会」での抽選会やレディスダブルスチャリティゴルフの参加費などを寄付金として集めている。

## 公式メッセンジャーのモモ妹も活動を披露／ピンクリボン報告会



日本対がん協会は朝日新聞社とともに12月6日、東京・有楽町で「ピンクリボンフェスティバル2013」報告会を開催した。協賛企業や支援団体から約70人が集まり、今年度の活動を振り返りつつ、今後の展望な

どを語り合った。

主催者を代表して、秋山耿太郎・日本対がん協会理事長、宮田謙一・朝日新聞社企画事業本部長があいさつ。宮田本部長は、台風の影響で中止した仙台の会場で、中止を知らずに来場した市民に対応する中で、「中止とは聞いたのですが、ひょっとして開催しないかと期待して来ました」と話す市民がいたことを紹介。「ピンクリボンスマイルウ

ークがすっかり定着し、楽しみにされている人がいることを改めて実感しました」と話した。

続いて「ピンクリボンフェスティバル公式メッセンジャー」PostPet生モモファミリーのモモ妹が、ソネット株式会社の協力で登場した=写真。

これまでピンクリボンフェスティバルに参加し、自身のブログでレポートをしてきたモモ妹は今年、公式

メッセンジャーに就任。オープニングナイトから始まり、これまで以上に各会場に足を運び、イベントの手伝いやレポーターとして大活躍した。歩ききった人に完歩賞を渡す役目をした際に、「モモ妹ちゃんから完歩賞をもらって疲れがふつとんだ」と声をかけられ、「私のほうがパワーをもらいました」とのメッセージを司会者が「代読」。会場から笑いがこぼれていた。

# 長寿県・長野で「がんセミナー」

## がん対策推進条例のエピソードなども紹介

日本対がん協会と長野県健康づくり事業団(日本対がん協会長野支部)は12月6日、長野市の若里市民文化ホールで「全国巡回がんセミナー長野会場」を開催した。約150人の市民が参加。専門医の講演や、長寿日本一の長野県のがん対策づくりのエピソードなどを熱心に聞き入った。

講師は垣添忠生・日本対がん協会会長、小泉知展・信州大学医学部教授・信州がんセンター長、宮澤敏文・長野県がん征圧議員連盟会長の3人。

「我が国のがん対策に占める検診の重要性」と題して講演した垣添会長は、自身のがん体験に触れながら、がんとはどのような病

気か、予防と検診、診断と治療、国のがん対策などを分かりやすく話した。

小泉教授は「長野県におけるがんと長寿」をテーマに、がんによる死亡率を高い順に並べると、長野は最下位、「つまりワーストです」と逆説的に説明。長野のがんの特徴や地域がん登録の大切さなどについて語った。

宮澤県議は2人の医師とは異なる立場で、「日本一の健康長寿県長野のがん対策推進条例はこうしてスタートした」と題して話した。宮澤県議は、親をがんで亡くした体験があり、同条例の制定に際しては、がん患者・家族、医師会などの意見の取りまとめに力を注



「がんと長寿」をテーマに講演する小泉知展・信州大教授

ぎ、条例制定を主導した。講演では、こうしたエピソードを紹介しつつ、県内のがん治療を取り巻く環境などを説明した。

長野県では、がん患者支援イベント、リレー・フォー・ライフも長野、松本両市で開催され、がんへの理解が進む。セミナーの開始前には、その映像がテーマソングとともに紹介され、

がん征圧の取り組みがアピールされた。

◇

巡回がんセミナーは、がん情報の偏りをなくすため、専門医らが全国各地で講演し、がんの早期発見・早期治療を呼びかけるもので、2007年度にスタート。年に数回開催している。今年度は、佐賀、愛媛、長野の3県で実施した。

## がん患者を支える家族の心得 「まず自分自身を大切に」

「がん相談ホットライン」より⑱

「起きてきたら電話を切ります。それまで話を聴いてください」

夫の眠った隙をみて電話をかけてきたのは、大腸がんを治療している夫を支える奥さんでした。

ご主人が大腸がんと診断されたのは3年前。以来、手術、化学療法と、ずっと続く治療に夫婦二人三脚で向き合ってきたそうです。

病気や治療に関する情報を一緒に探し、入院中は一日も休まず病院に行き、退院して通院治療が始まってからは付き添いを欠かさなかったそうです。

それだけではありません。少しでも夫のためにと、バランスのいい食事

を、と栄養のことを考えて作っています。親戚や近所付き合いもあります。子どもはいないので、すべて、妻として当然のことだと思っ

て一人で努めてきたといいます。時々「疲れたな…」と思うことがあっても、夫は治療を頑張っているのに自分が弱音を吐いてはいけません、もっと頑張らなくてはと思っています。

気分転換をした方がいいと友人が食事に誘ってくれて、自分だけ楽しい思いをするのは夫に申し訳ないかと断り、長年続けていた趣味の習い事も、夫を思うと罪悪感を覚えてしまい続けることができなくなると

いいます。

しかし、闘病生活が長くなり気力も体力も限界に近づき、辛さを抱えきれなくなり受話器をとったそうです。声が小さいので、尋ねると、夫に気付かれないように配慮してのことだそうです。弱々しいその声から、疲弊しているのは明らかでした。

家族ががんになった時、「自分に出来ることはないか」「出来ることは何でもしてあげたい」……多くの方がそう思うでしょう。そのことに一途になるあまり、自分の生活や、自分の時間を忘れ、「がんになった家族のために」と頑張りすぎることが少なくありませ

ん。その結果、自分が疲れていることにすら気が付いてないことがあります。

患者さんを支えていくには、家族が自分の身体と心にかかる負担を知ることが大切です。そして、頑張りすぎず、自分の時間を持ってリフレッシュすることが重要です。

そうすることが気持ちに余裕をうみ、患者さんを支えていく力に繋がるはずだからです。

もちろん周囲からサポートを得ること、自分の気持ちを話せる人をつくることも必要ですが、まず、自分自身を大切にすること——忘れがちですがこれはとても大切なことです。

## 学生のみなさん 奮って応募してください がん征圧ポスターデザインコンテスト公募始める

学生のみなさん、がんで苦しむ人をひとりでも減らすために、あなたのデザイン力を貸してください—日本対がん協会は、2014年度のがん征圧ポスターのデザインの公募を始めました。テーマは、「がん検診に行こう」。がん征圧月間(9月)にあわせて全国の自治体や保健所、医療・検診機関などに掲示します。早期発見・早期治療によるがん征圧をアピールします。

テーマを「がん検診に行こう」と決めたのは、日本人のがん検診受診率が20%

台と、非常に低いためです。日本のがん対策の要となるがん対策推進基本計画が目標とする50%(胃、肺、大腸は当面40%)の半分ほどしかありません。乳がんと子宮頸がんの検診受診率が先進諸国では70~80%あるのと比較すると、その差ははっきりしています(日本人女性の乳がんと子宮頸がんの検診受診率は24.3%=国民生活基礎調査2010年)。

これを、若い世代のデザイン力で引き上げようというのが、コンテストの狙い

です。

応募資格は、大学生、大学院生、短大生、専門学校生で、1人はもちろん、グループによる応募も可能です(グループの場合は、全員に資格が必要です)。

応募方法は、エントリーページ(<http://www.jcsposter.com/entry/>)より応募フォームに必要事項を入力し、エントリーしたうえで、指定の応募用紙と作品(B2判)を2月28日までに、〒150-0036東京都渋谷区南平台町5-12-307「がん征圧ポスターデザ

インコンテスト事務局」に郵送してください(当日消印有効)。

グラフィックデザイナーや医師らでつくる審査委員会で審査をし、最優秀賞1点(副賞10万円分の商品券)、優秀賞3点を選びます。最優秀賞は、がん征圧ポスターとして約5万部制作し全国に配布します。

募集要項や注意事項はエントリーページに掲載しています。お問い合わせは、日本対がん協会 広報担当 白井もしくは小西(電話03-5218-4771)まで。

### がん征圧の遺志を繋ぐ“希望のヒーローたち” ヒーローズ・オブ・ホープの三浦さん死去

「がんという病に対する社会の意識を変えよう」—そう訴え続けた一人の“ヒーロー”が昨年11月、帰らぬ人となった。

日本でのリレー・フォー・ライフ(RFL)の発展に情熱を注ぎ、国際リレー・フォー・ライフから「ヒーローズ・オブ・ホープ」に選ばれた三浦秀昭さん(横浜市、享年57歳)が亡くなった。訃報と時を同じくして2人のヒーローズが誕生し、日本のヒーローズは三浦さんを含め14人となった。仲間たちが思いを繋ぎ、日本対がん協会とともにがん征圧活動を進めていく。

2003年に肺腺がんを患った三浦さんは05年3月に大阪で開かれた「がん患者大集会」でRFLを知った。「日本でも開こう」と、ブログなどを通じて全国に

賛同者を募った。

その思いが繋がって06年、茨城県つくば市で試行的ながら日本でのRFLの初開催が実現した。その後も新横浜大会の実行委員長を務めたほか、メディアや講演会などを通してRFL普及や患者支援、がん医療発展のために精力的に活動した。各地のRFL会場に向き、相談役として、また仲間として寄り添ってきた。

そんな活動が讃えられて2010年、日本で最初に「ヒーローズ・オブ・ホープ」に選ばれた4人のうちの1人になった。

ヒーローズは、がんに勇敢に立ち向かうサバイバーの象徴としてRFL開催国から年に数人が選ばれ、がんを取り巻く社会を変える活動の先頭に立つ存在として期待されている。

ヒーローたちの軌跡は日本でのRFLの歩みと重なる。つくば市でのRFLに参加した人たちが、各地でその活動の先頭に立ち、RFLは急速に広がった。

受賞者たちは、実行委員長や地区ブロックのボランティアリーダーなど、さまざまな立場で活躍している。手術、治療を重ねながら、という人も少なくない。三浦さんもその一人だった。

2013-14年のヒーローズに、アグネス・チャンさん(東京)と横山光恒さん(岐阜)が選ばれた。横山さんは、つくば市での開催でRFLを知り、三浦さんの受賞でヒーローズの存在を知ったという。

三浦さんはヒーローズ受賞の際、こんなメッセージを残した。



ヒーローズ・オブ・ホープのメダルを手にした三浦さん=2010年

「皆の力で、日本のがん医療を変えていくことができるということ伝えてい。そして、参加することにより、後輩たちに勇気と希望を与えていくことを」

種をまいてから7年目の13年、RFLは全国41会場に広がり、参加者は8万人に。がん研究への助成プログラム「プロジェクト未来」も2年目を迎えた。

がん征圧への道はまだ遠い。しかし、日本対がん協会はヒーローたち、各地の実行委員と共に、その道を着実に歩んでいる。きっと、ゴールが来ると信じて。(日本対がん協会RFL担当 梶田亜由美)